第２４回研究会

平成１９年６月５日（火）午後２時
消防庁舎　３階　大会議室

主な内容

◆市民協働のまちづくりにおける課題について
◆市民協働パネルディスカッションについて

前回、６月２４日(日)に開催する「市民協働パネルディスカッション」での委員の発言内容の確認をしましたが、今回は、このパネルディスカッションにおいて、市民協働研究会としての第 1 次提案を示すとともに、市民協働のまちづくりに向けて、具体例から協働をいかにして理解してもらうか、そのために委員がどのように発表していくのが効果的なのかということを中心に議論をしていきます。

【小林会長】研究会が始まって 1 年が経過し、第 1 次提案を市民に問うところまで来た。パネルディスカッションの当日の流れなどを確認した後、われわれが市民に示す第 1 次提案に前回の意見交換会での意見が反映されているかを確認したい。意見交換会での意見に対してどのように議論をして、ここに反映させたと言えないといけない。今日はパネルディスカッションに加わっていただく江南市社会福祉協議会の方も出席している。

【社協：伊藤】今日は、今までのプロセスがわからないままの参加だが、何らかの形でこれから研究会に関わっていきたい。

【小林会長】当日の全体司会は籾山委員、私はコーディネーターということで、まずは私が趣旨説明をする。協働の目的はまちづくりであり、市民と市役所の協働、市民同士の協働などがある。パネラーの皆さんには、いろいろな課題に対して、このように市役所と市民が協働するときっと上手くいくのではないかという内容で、具体的な例を挙げながら話をしていってもらいたい。

伊藤さんについては内容を今日聞かせてもらいたい。それを踏まえて、太田委員が協働の課題解決に向けた内容を話す。そして最後に尾関委員が協働の運営ルールについて話す。休憩を挟んで、意見交換を行う。まずは、今日発表用のペーパーを提出した委員から発言をしてもらいたい。

【栗本委員】私は女性連絡協議会に所属をしている。環境に関して関心がありマイバック持参運動に取り組んでいる。

昨日会合があって、発表の内容を聞いてもらった。皆で取り組んだことが入っていないと言われたが、今回は協働について主眼を置いて縮めて発表する。これまで色々な出来事があったので、何を発表すればよいのか迷った。まず、カーテン地を織物業の方からもらい袋を作った。オリジナルバックは、会員からポイント柄を募集した。

【尾関委員】何人ぐらいの仲間で活動しているということを話すとよいのではないか。
【太田委員】前回、パネラー発表内容の表題についての議論があったが、具体的な活動を表題にしている場合もあれば、分野的な表題もあるので、トーンを統一したほうがよいのではないか。例えば栗本委員については「買い物袋から考える環境保全」とするなど、岩根委員、藤田委員のようなタイトルに合わせたほうがよい。なぜなら、文字から受ける印象として、この協働の議論が委員の所属団体の支援というように取られてはいけないし、参加者の中にも色々な活動をしている人がおり、パネラーが自分の活動の話をしたいと思われてもよくないからである。防災活動の発言についても「自分たちの手で地域の安全を考える」などとして、この活動は色々な人に関係があるのだと思ってもらえるようにしたほうがよい。私の表題も「協働の課題解決に向けて」としたい。できるだけ簡潔な言葉で表したほうがよい。
【小林会長】具体的な表題は、内容を想像しやすいが生々しい内容もある。また、団体を支援していると思われてしまうこともあるかもしれない。
【太田委員】大倉委員は「尾北シニアネット」の名前を配布資料には出さずに、説明の際に言葉で表現したほうがよい。また、早瀬委員の「ふくらの家にいらっしゃい」も同じである。
【大倉委員】具体的な事例を話しながら、協働のコンセプトを理解してもらおうと思ったが、ＰＲと取られては困る。
【太田委員】できればそのように思わせないようにしたい。皆、特に意見交換会で出た意見がどう反映されているかを知りたがっている。
【大倉委員】では見直しをすることで構わない。
【大矢委員】発表の前に一言断っておいてはどうか。
【太田委員】私の発表が「協働の課題解決に向けて」ということで、昨年の意見交換会を踏まえた内容ということになると、早瀬委員や大倉委員の発表内容も個々の活動を表に出すよりは、協働を理解してもらう内容にしたほうがよい。参加者も自分の活動をＰＲしたいという気持ちがあるのに、研究会委員から自分の活動の話をされると面白くないこともあると思う。
【尾関委員】委員自身の活動報告になると、「何だ？」ということになる。「これからこういうまちづくりをしたい。例えば・・・」という話の中から、だから協働が必要になってくるというストーリーになる。既存の活動は協働だとは思っていない。既存の活動の発表だけだと、わざわざガイドブックをつくる必要はないと思われるので、「こういうまちをつくりたい」から「こうしたい」という話の中で「協働はこうやりたい」という発言をしていく。既存の活動ではないからガイドブックが必要になるのだということがわかってもらえる。栗本委員の発表の中に、なぜ協働のルールが必要なのかということが表現されているので、私も話しやすくなる。「こういうまちづくりをやりたい。それを市民協働でやっていくのだ」という内容にする必要がある。栗本委員や藤田委員が、自分の活動で困っているのは、活動が協働の形のなっていないからである。ルールがないと、既存のリーダーがついて来いよという形

になってしまう。市役所の都合ということもある。だからどうしても協働のまちづくりのルールが必要なのだということになる。活動の発表会と思われないためにも、共通の統一テーマにそって話した方がよい。

【岩根委員】発表の内容として何がポイントかわからなかった。色々な市民が参加するので、こんなことをしたら良いまちを作ることができるという内容にしたが、もう一度見直したい。どういうところを大切にするのか、共通認識を持った上で取り組んだ方がよいのではないか。

【早瀬委員】「ふくら」の活動は、いかにして人材を発掘し育成するかということについての具体例として入れた。

【太田委員】全部見直すということではなく、トーンは合わせた方がよいということである。

【石川委員】具体例から協働の必要性の発言に移るときに、何が問題であるから協働が必要であるということをもっと表に出したほうがよいのではないか。

【栗本委員】当時の話しとして生々しい話もあるが、私たちと市役所の両者において、一緒にやっていくのだという認識がなかったことが問題であった。

【小林会長】程度の問題はあるが、言葉で話すのであれば多少は入れてもよいのではないか。

【尾関委員】市役所の人事異動によって担当者が代わるということは、避けられないことでありそれに関しての不具合ということなら話しても構わないのではないか。

【大倉委員】私は「高齢者の生きがいづくり、そして社会貢献へ」とした。協働の課題として、地域の連帯を高めていかなければならないということがあり、高齢者が生きがいを持って地域を支えていこうという趣旨である。協働という新しいコンセプトに合った話をすることにする。会場から質問が出たら、「尾北シニアネット」の活動を具体例として話す。協働のまちづくりを進めるために、市民と行政との橋渡し役になっていかなければならないと考えている。市民活動団体や市民などがいつでも集えるようなサロンも必要であると思う。高齢者の集う場を発展させて、地域振興に役立てようという例もある。具体的には、ＩＴ社会が進む中で、インターネットをもっと宣伝して地域の皆がコミュニケーションを図れるようなシステムがあればよいと思う。高齢者のもっているキャリア、経験を活かして社会貢献につなげるという話をしたい。

【籾山委員】知っている人は団体名を出さなくてもわかる。発言は構わない。

【大倉委員】団体のＰＲをしたいわけでないので構わない。初めての協働についてのパネルディスカッションだから、既存の活動の名前を出すことはやめる。

【小林会長】大倉委員はトーンを合わせることになった。そういう方向でよいか。

【社協：伊藤】江南市社会福祉協議会の名前が出てしまうので、自分の立場が難しい。社協が市民にどう理解されているかということや、研究会のこれまでのプロセスがわからない中で、社協の活動をどのように紹介し、メッセージをどう出すか考えている。社協の役割としては、まちづくりがゴールであるが、社協の職員だけではで

きない。ボランティア、市民、福祉施設の人たちと福祉でまちづくりを目指している。地域福祉計画を２年間かけて作ったが、プロセスとして協働もあった。具体的な事例がないと、協働して何を進めてよいかわからないと言われる。社協のボランティアセンターがあるが、福祉だけではまちづくりは成り立っていかないので、行政経営課と一緒にＮＰＯとの関係も整理していきたい。社協が描くまちづくりを提案して、そのためにどのような仕組みが必要なのかということを発言していきたい。

【大倉委員】社協は、全国組織があって、そこからこうやりましょうという指示があり、地域ではこのようにやるということになるのか。市社協としてこうやりたいと言えるのか。

【社協：伊藤】全国社協はあるが、江南市社会福祉協議会も独立した社会福祉法人であり、地域に応じた活動をしている。それで独自の地域性をどう出していくのかが問われている。

【大倉委員】江南市社会福祉協議会は、まちづくりに関してどうしたいのかということを聞きたい。

【大竹委員】行政の一部と見る人もあると思うが、社会福祉法人としての活動がアピールできるようにしていくのがよい。行政というように見られるとよくない。

【小林会長】全国社協はあるが、社協の活動は地域によって形態が全く違う。行政の一部というイメージの社協もあれば、独自色の強いところまである。江南市社協がどうなのかわからないが、公式には話しにくいところもあるかもしれない。

【社協：伊藤】事業を直接行うのはプロパーの職員である。当日は、ある程度個人での意見と社協の代表としての立場を分けて話すつもりである。

【太田委員】福祉分野の議論が不足しているので、伊藤さんに参加いただけるのはありがたい。役割ということになるとつらいが、「まちづくりの中の社協の役割」くらいのほうがよいのではないか。

【社協：伊藤】お任せしたい。

【尾関委員】こういうまちづくりができたらよいということで、福祉のまちづくりという内容で話していただければよい。そして、市民協働のルールを踏まえて、こういうまちづくりがあればよいという内容であればありがたい。今はまだ社協の方針になっていないが、自分の中で暖めているものがあればそういうものを出してもらえるとありがたい。それを市民協働で解決できるのだということなら素晴らしいものになる。

【太田委員】私は、協働の課題として意見交換会で出された意見に関するところを中心に話す。内容は３つくらいにまとめて、協働のための地域連帯、協働のための地域課題設定と評価、協働の場づくりについて、現状を簡潔に話し、地域の中のつなが

りが薄れているのでＮＰＯやボランティアグループが、市民や町内会と行政との橋渡しをすることが必要になる。地域通貨を通して、連帯を作っていこうということも１つの解決方法ではないか。というように課題解決のために考えられることを話す。協働のための地域課題の設定は前段で話してくれている。問題が共有化されていないことが課題であり、地域課題に対し明確な共通目標を持っていくことが必要である。地域課題は連帯のための目標であり、モデル地区を設定して、全市に広げていく。協働の活動評価委員会の創設も必要であり、現時点では自主的に情報を引き出せるシステムもない。協働のための場づくりも大切である。例えば、放課後支援を市民活動で行うために、公民館などを利用して柔軟に行えるような仕組みが必要であるということについても時間があれば話していきたい。

【小宮委員】協働を何のためにするのか、協働は自分たちのためにする。これをどうやって理解してもらうか。昨年の意見交換会でも自分なりに考えて話したが、今回もどのように受け取ってもらえるか分からないので不安である。

【藤田委員】小宮委員の気持ちは、介護などの実体験がないと伝わらないかもしれないが、遠慮せずに話してほしい。

【太田委員】ネットワークを作って、老いを見守りたいということを言いたいのなら、「地域で老いを見守りたい」とすればつながりが出るし、もっと参加者に理解してもらえる。小宮委員のせっかくのタイトルは副題でどうだろう。

【藤田委員】私も「文化の振興に思う」というようにしたい。

【大矢委員】小宮委員の発言に「かかり人」という表現が出てくるが、意味がわからないので意味を説明する必要がある。

【小宮委員】誰かの世話になっているということで、一人前ではないという意味である。

【尾関委員】こういうまちをつくりたい。だから市民協働が必要なのだというトーンにする。できるだけトーンを合わせる方向であとは発表者の判断に任せてはどうか。

【太田委員】内容を変える必要はないので、タイトルだけ同じトーンにしたほうがよいということである。

【小林会長】タイトルも前回は個性に任せた。

【尾関委員】参加者を迷わせないようにすることが大切である。

【小宮委員】全体の中で、それがわかりやすいのなら、タイトルは変えて、副題として残したい。

【小林会長】タイトルを見直して、次回持ち寄るということでよいか。順番の流れもわかりづらいことはなかったか。

【大倉委員】協働の５つの柱の順番にするのかと思った。

【小林会長】発表内容の分野が、５つの柱のどこかには分類できるが、明確に言えないところもあるので、そのような分類はしないことになった。

※　発表の順番は、内容のつながりから①栗本委員、②藤田委員、③望月委員、④早瀬委員の順とし、岩根委員、小宮委員、大倉委員の順については、委員の間で意見が

分かれたため、事務局に一任されることになりました。

＜休憩＞

【小林会長】議論に戻る前に、５月１５日に愛知江南短期大学地域協働研究所の講座で、客員研究員の長崎委員が自治基本条例などについて発表したということである。発表の内容は、この研究会でも発言をしているのでわかると思うが、他の研究員などから色々意見が出されたということで、その状況について、発表を聞きに行かれた籾山委員に報告していただく。

【籾山委員】市民協働研究会は「市の中で踊らされているのではないか」という意見や「自治基本条例は、協働研究会ではできない。別のところでやります。」という意見が出ていた。このようなことを言う人がいるので、市民として成果を出さないといけないと思った。このような人がまだ多いということを認識して、今度のパネルディスカッションに臨む必要がある。

【小宮委員】そのような言葉に踊らされないで、足元を固めていかないといけない。自分たちの問題であるとわかってもらう必要がある。体制を批判するエネルギーを自分の足元を固めていくエネルギーにしていく。振り回されないことが大切である。私たちがしっかりして、協働の架け橋となるという気持ちを持って、色々な中傷がある中で、自分たちのため、子どもたちのためと思い進めていきたい。

【籾山委員】短大の地域協働研究所でも反応がその程度ならば、市民はもっとわからないはずである。

【藤田委員】政争の道具にされてはいけない。

【栗本委員】自分自身のグループの中でも、研究会はどんなことをしているのかと言われる。協働について真剣に議論している。議論の中身はホームページを見てくださいと言っている。

【望月委員】市職員にも、協働について勉強して、一緒にやっていきましょうと言っているが、職員もホームページを読んでいない。もっとＰＲしないといけないのか。

【尾関委員】実際に踊らされているかどうかは、自分たちではっきりさせておけばよい。市に文句を言いたい人はたくさんいる。気にしなくてもよい。条例を他でつくるというのであれば、それは結構。私たちは、私たちのガイドブックをつくり、自治基本条例と市民協働・参画条例を提案していけばよい。

【小宮委員】市議会議員の皆さんと手をつないでいきましょう。

【行政経営課長】職員も協働に敏感でない。

【岩根委員】協働についてはあまり理解されていない。これからの結果が大切であり、踊らされていなかったというものをつくるために参加しているのである。

【尾関委員】忠告と思ってあまり腹を立てないほうがいい。協働の例がないのだから仕方がない。敵対的に市民協働を見ている人もいる。具体的にこういうことをしていこうと呼びかけていくしかない。この市民協働研究会で、ガイドブック案、自治基

本条例案、市民協働・参画条例案を作成し、年内に市長に提出する。

【小林会長】籾山委員の報告から、決意、結束を確かめることができた。私も大学の関係で、主体的に市民が動いているというようにこの研究会のことを紹介している。方向づけをしないとこのようになる。注目されると、失敗することはできない。ハードルは高いが、これで市もいい加減なことができなくなる。成果をあげていかないといけない。市民参加の条例案が議会で否決されることはたくさんあるので、どれだけ多くの市民の意見を汲み取り、ガイドブックを作って、条例案を作ったのかをアピールすることで否決できなくなる状況を作らないといけない。そういう手続きの１つがパネルディスカッションである。協働にアレルギーがある人もいる。共感を持ってもらえるような話ができればと思う。

【事務局】前回の意見交換会で出た意見が反映されているかということだが、意見で出された地域通貨は、人のためにやったことをポイント化し、自分が蓄えとして、必要なときに利用できるシステムだが、最近の状況はどうなのか何か参考になることがあれば、その辺りを伊藤さんに聞きたい。

【社協：伊藤】時間預託を地域通貨に置き換えるものだが、仕組みの良さだけでは上手くいかず、中途半端なものは失敗する。仕組みを動かす方の力、いわば地域力があるかどうかが鍵になる。また、時間をためて本当にそれが使えるのかという保証があるのかも問題である。

【小宮委員】ＮＰＯで運営することは難しい。やはり市がバックにつくと信頼性がある。合併で市がなくなっても、自治体が引き継ぐことになる。限られた財政の中で、江南市民が相互扶助をどうしていくのかを考える必要がある。

【社協：伊藤】皆さんのパワーを市民がどう判断するのか、地域通貨は市の施策になるのか、サービスになるのか、イメージがつかないが、その先は私と皆さんのイメージにずれがあるかもしれないので整理する必要があると思う。

【尾関委員】われわれが地域通貨を実現しましょうと提案すべきではない。地域通貨を作りたいという要求を持った市民が集まって、市民協働の運営ルールに基づいて協働していき、商工会議所など色々な主体が協働していけば上手くのではないか。市役所が主体で作っては、押し付けになるから上手く行かないかもしれない。自主防災会のように上からの呼びかけは失敗する。

【小林会長】地域通貨は、今後の取組みの１つ、解決策の１つになるかも知れないというように理解しておけばよい。

【太田委員】地域通貨は地域連帯のための１つの手段として考えられる。協働のための場がいるということについては、解決のために市民協働センターが必要である。また、協働活動委員会や協働活動評価委員会を作ってそこで議論していくことが考えられますというように話していく。

【尾関委員】市民協働センターができたら、協働研究会が運営していくのがよい。場合によってはＮＰＯ法人化して取り組んでもよいのではないか。地域通貨もこのような方法でやれば上手くいく可能性もあるではないかということで、市民が自発的に

取り組むことも考えられる。

【社協：伊藤】個人的には社協もこうした協働に参加できればよいと思う。市民協働センターができれば、社協が出向いて相談にのったり、福祉の分野で協働していくためのプログラムを提案していくこともできるのではないか。

今回は、６月２４日(日)に開催する「市民協働パネルディスカッション」での各委員の発表内容、流れなどに対する共通認識を持つための議論となりました。次回は、もう一度、パネルディスカッションの準備を確認するとともに、昨年の意見交換会などで出された意見に対するその後の研究会としての議論がどうだったのかということについて確認することにします。